

埼玉県における周溝墓出土の底部穿孔壺について

—坂戸市木曽免遺跡の事例を中心に—

篠田 泰 輔

要旨 昨年度報告した坂戸市木曽免遺跡の大型周溝墓を位置づけるために、周辺遺跡から類例を抽出し、遺構・遺物の面から分析を行なった。木曽免SR4は、周辺遺跡の大型周溝墓と比較して、比肩するほどの大きさがあることを示した。また、規格的なつくりの焼成前底部穿孔壺が、有力周溝墓からしばしば出土していることを確認して、両者の要素をもつ木曽免SR4が、周溝墓の中でも優位性が高いことを指摘した。加えて、木曽免SR4の築造時には、周辺の台地において、諏訪山29号墳や山の根古墳などが築造されており、木曽免SR4が周辺の権力に抑えられて、墳墓築造を制限されていたのではないかと推定した。

1 はじめに

木曽免遺跡の発掘調査報告書は、昨年度、埼玉県埋蔵文化財調査事業団より刊行された(篠田2008)。木曽免遺跡は、弥生時代中期後半(宮ノ台式)の環濠集落を主とする複合遺跡である。加えて、古墳時代の「方形周溝墓」(註1)を2基確認し、そのうち1基は20m級の大型「方形周溝墓」であり、古墳時代にとっても非常に重要な遺跡である。そのため、報告書のまとめで詳しく触れられなかった大型「方形周溝墓」について、周辺遺跡の様相を踏まえ、歴史的な位置づけを行ないたいと思う。

2 木曽免遺跡の概要

木曽免遺跡は、坂戸台地の東端に立地し、北・東側には沖積低地が広がっている(第1図)。事業団の調査区は、遺跡の最も北側に位置する。

大型の周溝墓はSR4で、全体の規模が南北21.79m、東西20.78mである。やや南北に長い方形を呈している。方台部規模は主軸16.38m、幅14.18mである。墳丘は確認できず、埋葬施設も検出されなかった。溝幅は3.0m前後となる。南溝は、東側に向かって0.78mと幅が狭くなっており、深さも0.04mと浅くなる。そのため、南東隅にブリッジを設けて

いる可能性がある。北溝から溝内土壌を検出しているが、少量の土器片を発見しただけである。

SR5は小型で、SR4の西側に近接して築かれており、SR4に付属する周溝墓と考えられる。

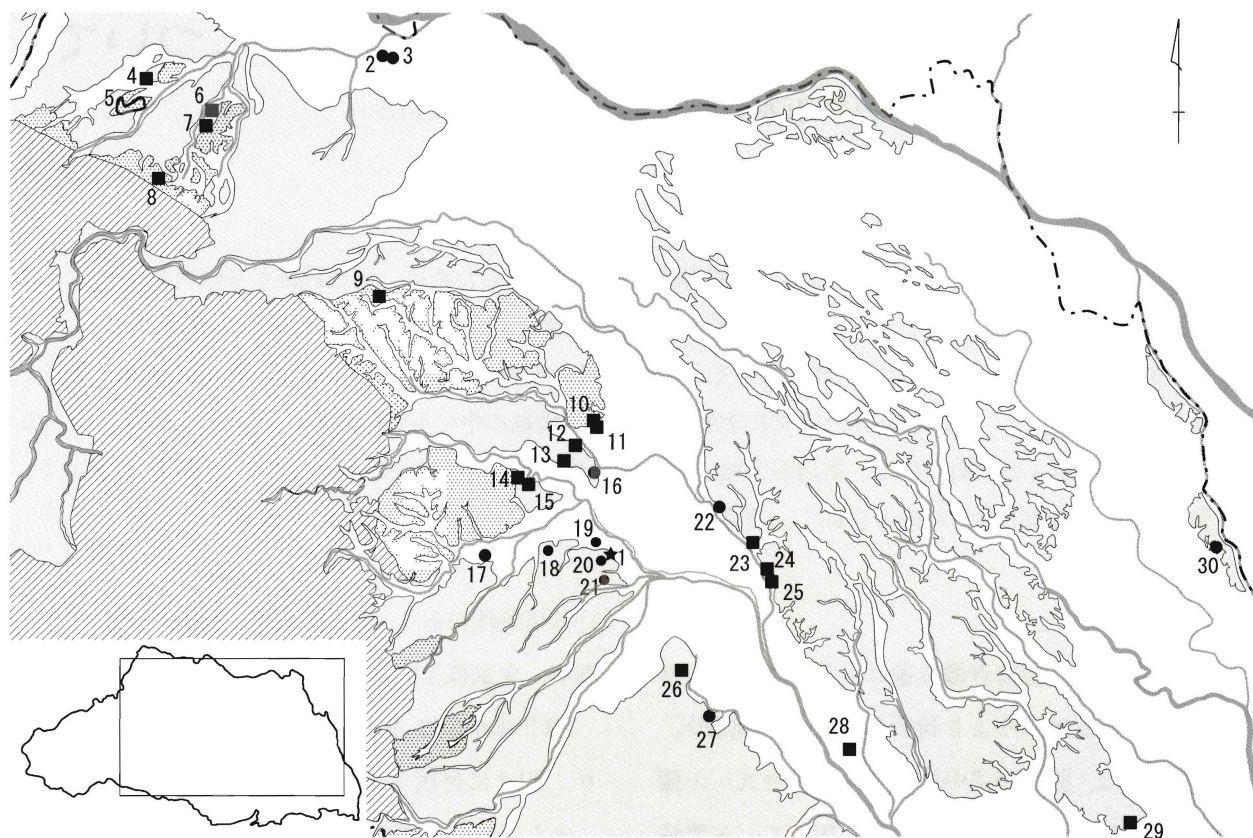
また、事業団調査区内では、周溝墓に伴う住居跡を検出していない。SR4は、馬の背状台地の最高所である北端に立地しているため、集落跡については、南側に展開することが予想される。過去に坂戸市教育委員会が、事業団調査区南側を調査した際、古墳時代前期の竪穴住居跡を13軒検出している(坂戸市教委1992)。

3 SR4出土土器について(第2図)

出土土器(註2)は大型壺2個体、中型壺7個体、中型埴4個体、小型埴5個体、器台1個体で、他に鉢、小型壺、甕がある。

中型壺は、すべて畿内系の二重口縁である(2～8)。口径・器高・胴部最大径が、20cm前後でまとめ、規格的なつくりの焼成前底部穿孔壺といえる。ただし、2のみ若干小さく色調が異なる。

中型埴・小型埴(11～13)は、個々の調整手法は異なるが、それぞれ同形同大に製作される。すべて焼成前底部穿孔で、最大径は胴部中盤辺りで扁平球形



1. 木曾免遺跡 2. 上敷免遺跡 3. 東川端遺跡 4. 鷺山古墳 5. 生野山古墳群 6. 川輪聖天塚古墳 7. 長坂聖天塚古墳 8. 中道1号墳
9. 塩古墳群 10. 山の根古墳 11. 三ノ耕地遺跡 12. 天神山古墳 13. 野本將軍塚古墳 14. 諏訪山29号墳 15. 諏訪山古墳
16. 下道添遺跡 17. 入西遺跡群（広面遺跡・中耕遺跡・稻荷前遺跡） 18. 勇福寺遺跡 19. 附島遺跡 20. 北谷遺跡 21. 景台遺跡
22. 西台遺跡 23. 熊野神社古墳 24. 殿山古墳 25. 江川山古墳 26. 三変稻荷神社古墳 27. 権現山遺跡群 28. 塚本塚山古墳
29. 高稲荷古墳 30. 権現山遺跡

第1図 埼玉県における底部穿孔壺出土墳墓とその周辺遺跡

を呈する。

壺、埴、器台を含めて外面調整はハケ調整後、部分的にヘラナデを施すのみで、ミガキ調整や赤彩は全く確認できない。

また、大型壺の1個体は折返口縁壺で、吉ヶ谷式系土器と思われる（1）。頸部は、くの字状を呈し胴部上半の縄文が消失する。最大径がおよそ胴部中盤に位置し、球胴形となる。底部には焼成後に穿孔を行なっている。

その他に、丁寧にミガキ調整が加えられた埴（14～19）が出土している。

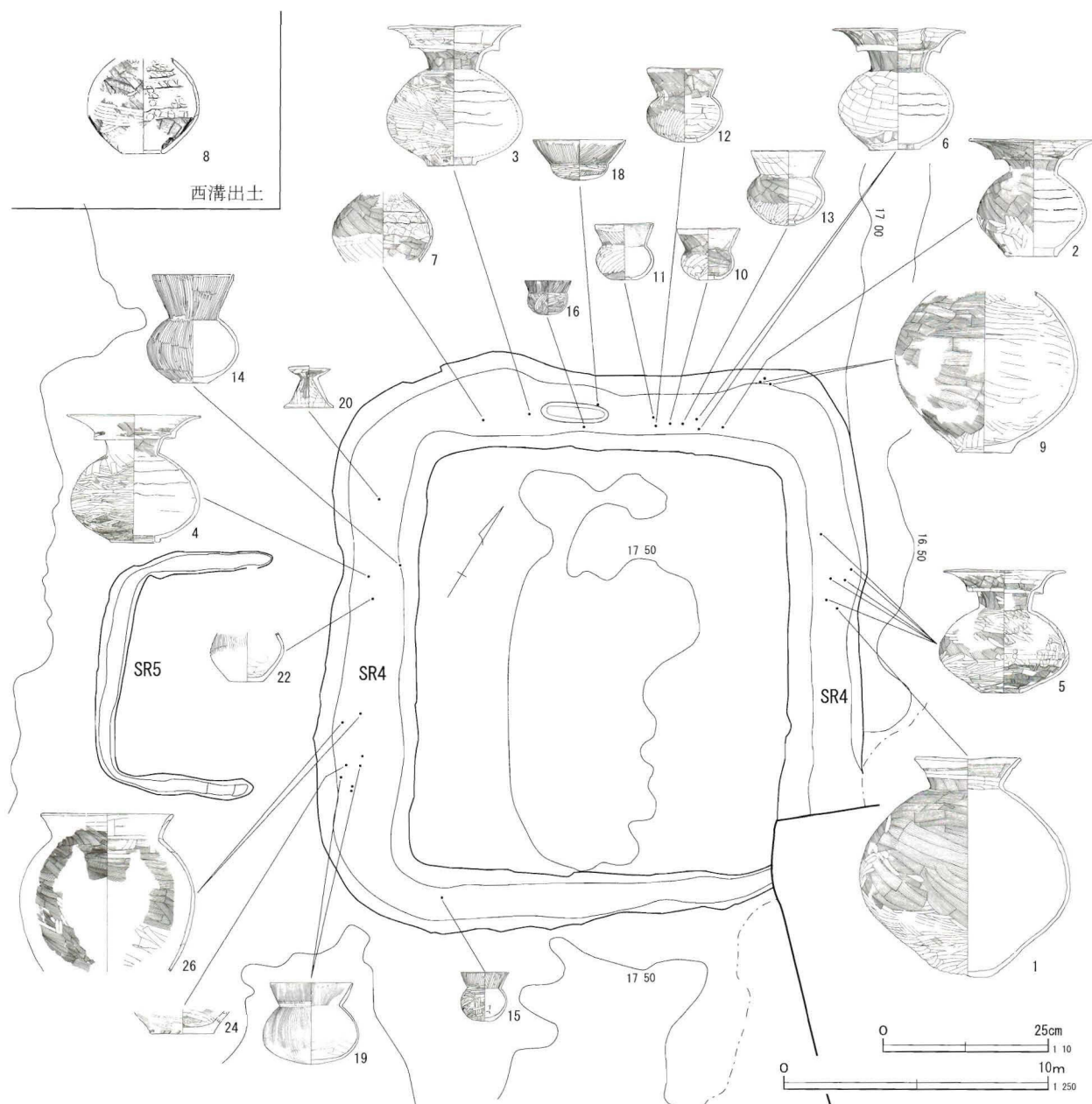
出土土器における最大の特徴は、中型壺、中・小型埴、器台の色調、胎土などが非常に類似している点にある。さらに、器台を除く器種間で同形同大の

ものを製作している。また、中型壺、中・小型埴はすべて底部穿孔であり、墳墓専用として同時期に製作したと考えられる。しかし、これらの土器群は、赤彩もされず、入念なミガキ調整も施されない、マツリ用としては見劣りするようなものである。

出土土器について、『関東の方形周溝墓』の編年（柿沼1996）に基づいて位置づけたいと思う。吉ヶ谷系壺、畿内系の二重口縁壺、埴などの形態とともに、球胴形を呈する壺や、くの字状口縁をもち長胴傾向のある甕から判断して、V期に位置づけられる。

続いて、木曾免SR4の出土状況を概観し、改めて土器配置について考えてみたい。

木曾免SR4における土器は、埴（14）以外すべて下層より出土している。なお、埴（14）の出土層位は



第2図 木曽免 SR4 (篠田2008)

上層である。中型壺、中・小型埴の製作の同時性については前にも触れたが、出土層位も異なる状況を指し示していない。

中型壺(5)の破片の散乱状況や、完形品ではない中型壺(7)が存在すること、また北溝の土器が方台部側に寄って出土している状況を加味した結果、方台部に配置された土器が転落したものと想定した。

出土土器は各周溝から確認できるが、特に北側で出土量が多い。壺・埴が列をなして検出されたこと

から、北側を意識していたことが明確に分かる(第2図)。また、東・西溝出土中型壺(4・5)は、東・西隅に配置されていた可能性もあり、北側に配置されていたともとれる。このように、木曽免SR4では、北側において集中的に列をなして配置する傾向が窺われる。

4 周溝墓における規模の比較

周辺遺跡におけるV期の周溝墓群の中で規模が大

きいものを抽出して比較を試みる。なかには、前方後方形を呈した周溝墓も存在するが、今回は後方部規模のみを対象にして比較する。

規模は、周溝を含めずに方台部の規模で比較を行なう。縦軸に長軸、横軸に短軸を図に表した（第3図）。なお、数値は、報告書に記載があるものについては報告書から引用し、記載がないものは報告書の図面から計測した。

(1) 入西遺跡群（坂戸市）

入西遺跡群は坂戸市西部に所在し、毛呂台地東端部から北側に広がる低台地上に立地している。遺跡群には、広面遺跡（村田1990）、中耕遺跡（杉崎1993）、稲荷前遺跡（富田1994）が展開し、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて周溝墓が集中して築かれている。

中耕遺跡の報告書において、広面・中耕両遺跡を対象に、大型周溝墓を中心とした群に分け、周溝墓の変遷を掲げている。その中で、2～3基を一つの単位として造営していたとされる。今回は、群中で規模が大きいものに焦点をあてる。

遺跡群中最大規模を誇る広面SZ9は、変形ながら前方後方形周溝墓と考えられている（第4図）。周溝は不整円形状で、南西溝には南方向に向かって斜めにブリッジを設けている。方台部は長方形を呈し、規模26.00×23.50mで、高さ2.0mの墳丘が残存する。

広面SZ16は、SZ9の南側に位置し、周溝墓群をのせる微高地の南東限に立地する。周溝は南北がわずかに張り出し、全周する。方台部は長方形を呈し、規模は13.60×12.80mである。

中耕SR13は、方台部規模11.90×11.10mを測り、周溝は四隅で幅狭となるが、全周する。

中耕SR21は、方台部規模15.75×13.70mを測り、周溝は全周する。方台部中央に約0.8mの盛土がわずかに遺存しているが、埋葬施設は検出されなかった。

中耕SR41は、方台部規模14.00×12.05mを測り、周

溝は全周する。方台部南側に約0.6mの盛土がわずかに遺存しているが、埋葬施設は検出されなかった。

中耕SR42は、前方部南東側は未確認だが、前方後方形と推定される。後方部の規模は17.35×13.10mを測る。周溝は後方部の2隅が途切れている。

中耕SR49は、方台部規模15.87×15.72mを測り、周溝は南西隅が浅いが全周する。

さらに、広面・中耕遺跡の南側に展開する稲荷前遺跡（B・C区）から大型の周溝墓を抽出する。

稲荷前B区SR01は、稲荷前遺跡B区で最大規模を誇る。方台部規模は15.28×14.96mで、周溝は全周する。

次に、稲荷前B区SR05は、方台部規模13.80×13.28mを測り、周溝は全周する。北溝は幅広く、中央部では細長く浅くなる部分が設けられている。

稲荷前遺跡C区では、SR01が最大で、方台部規模15.16×15.00mを測る。周溝は全周する。

稲荷前C区SR05は、方台部規模13.80×13.28mを測り、周溝は全周する。

稲荷前C区SR11は、方台部規模13.92×12.44mを測り、周溝は全周する。

(2) 下道添遺跡（東松山市）

続いて、下道添遺跡を取り上げる（坂野1987）。遺跡は、市野川と都幾川の低地を望む東松山台地の南東端に立地し、周溝墓13基が検出されている。

下道添ST02は南東溝が幅広いため、前方後方形と推定される（第5図）。全体の規模が22.0mで、後方部の方台部規模は、推定14.50×12.50mを測る。

下道添ST04は、方台部規模14.20×11.80mを測り、周溝は調査範囲内で全周している。検出されている周溝の隅部が最も幅狭となり、中央付近は外側に張り出している。

下道添ST13は西半分のみ検出されており、方台部規模16.00×14.90mと推定される（第6図）。

以上のような周辺遺跡の事例を挙げて、方台部規模の分布を第3図のように示した。まず、広面SZ9が、突出して大きいことは歴然としている。その下位の方では、15mを境にしてドットの分布が分かれ、差が認められる。大型の周溝墓と中型の周溝墓の境として認識してよいのではないだろうか。

木曾免SR4は、上位の分布域に含まれていることがわかる。そのため、周溝墓群のトップクラスの周溝墓と比べても、それらと比肩する規模を誇っていると言える。また、前方後方形の後方部規模と比較しても、引けをとらない大きさをもっていることが認められる。

すなわち、木曾免SR4が、周辺遺跡との比較を通して、大型周溝墓の部類に入ることが明らかとなった。

5 焼成前底部穿孔壺について

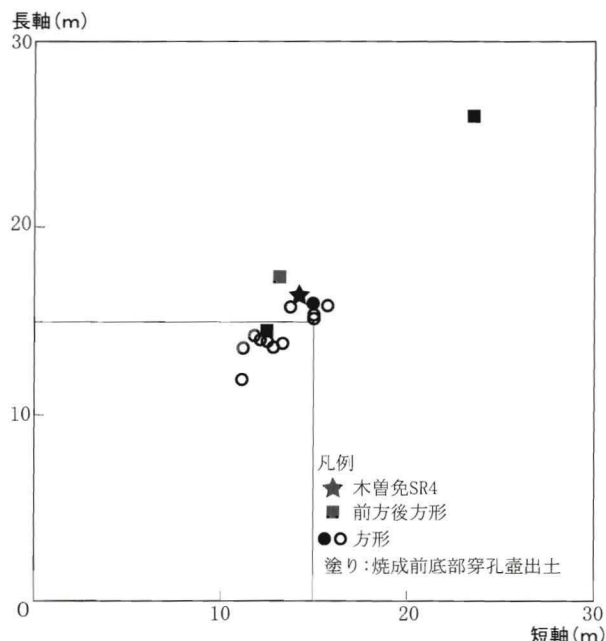
木曾免SR4において、多く出土している焼成前底部穿孔壺について考える。過去の研究成果を踏まえた上で、木曾免SR4を位置づけるために類例を挙げ、改めて検討したいと思う。また、次節で扱う出土状況および土器配置についても簡単に触れておく。なお、古墳からも出土しているが、ここで取り上げるものは、周溝墓に限りたいと思う。

まず、前節で挙げた大型の周溝墓の中から、幾つか類例を見出せるため、それらから取り上げる。

(1) 広面SZ9

広面SZ9からは、完形品の出土を見ないが、4個体の焼成前底部穿孔壺がある。形態は規格性が高く、ヘラミガキが全面に施されているが、ハケメをよく残している。

出土状況は、南西溝の西寄りに列をなして並んでいる。また二重口縁壺以外にも焼成前底部穿孔の埴が中央と南隅から出土している(第4図)。その他の土器群のほとんどは、南東側の突出部付近から集中



第3図 周溝墓規模比較図

して出土している。報告では、墳丘に樹立あるいは埋置していたものが転落したと想定されている。

(2) 下道添ST02

次に、下道添遺跡からも比較的規格性の高い焼成前底部穿孔壺が出土している。

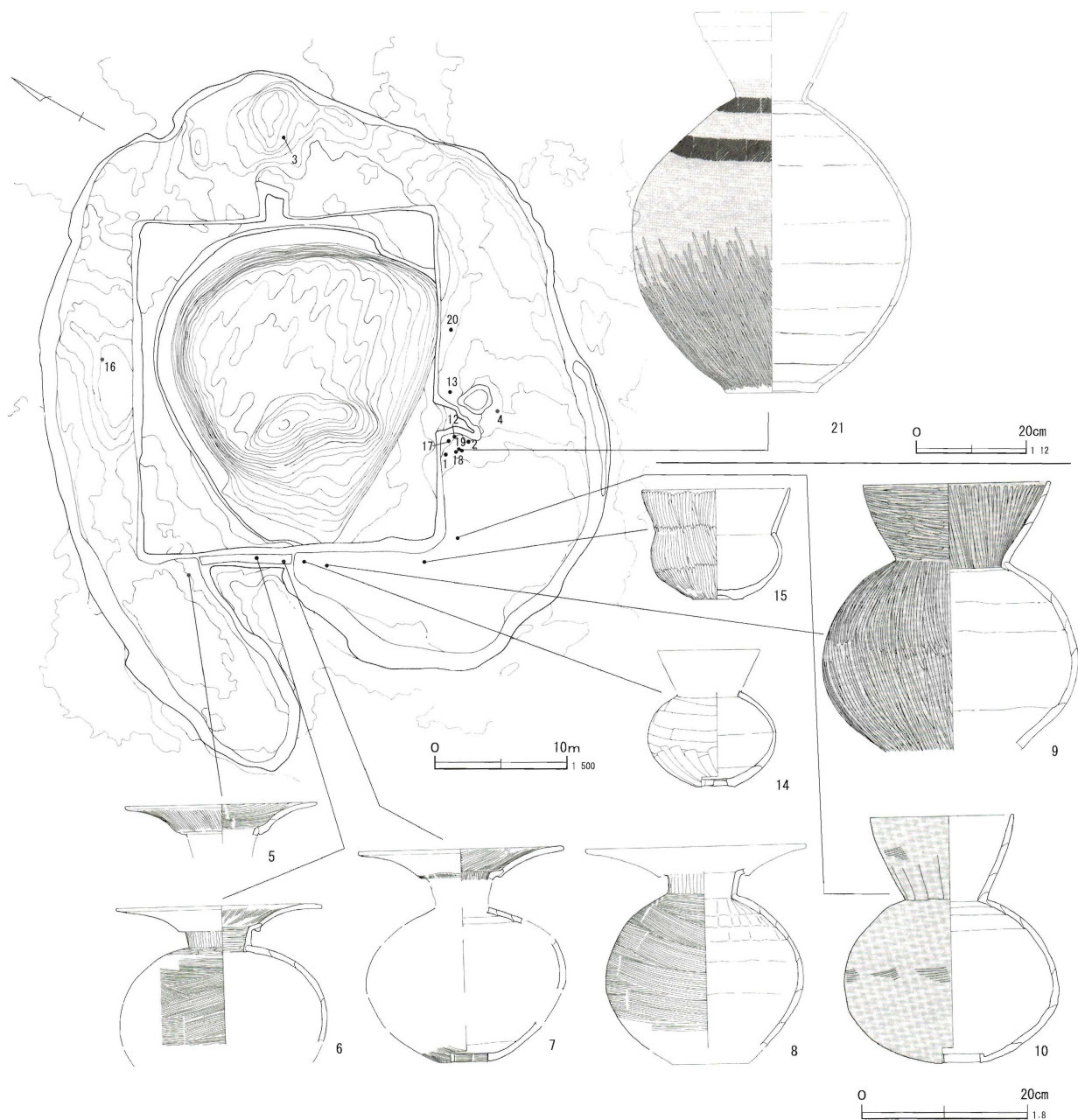
下道添ST02では、二重口縁壺3個体、単口縁壺3個体が見られる。外面と内面の口縁から頸部にかけて赤彩が施される。単口縁壺(3)を除いて、外面はハケ後、板ナデを施す。単口縁壺(3)は、口縁部が長く、外面ハケ調整で他と異なる。また、底部穿孔方法も棒状刺突によるとされている。

出土状況は、焼成前底部穿孔壺が各溝にそれぞれ見られる(第5図)。特に二重口縁壺は、南西溝の下層より集中して出土している。報告では、周溝内に一括供献したと推定されている。

(3) 下道添ST13

下道添ST13では、二重口縁壺2個体、埴1個体が見られ、他にも多くの土器が出土している。二重口縁壺の肩部には、櫛描文が加えられている。

各溝から土器が出土しているが、二重口縁壺を含むその他の多くの土器とともに、南西溝の中層より



第4図 広面SZ9 (村田1990改変)

集中して検出されている(第6図)。報告では、方台部から転落したと考えられている。

さらに、ここでは地域を広げ、埼玉県全域に目を向けてみることにしたい。

(4) 生野山78号墳(本庄市)

生野山78号墳は、概要報告によると、円形の周溝に方形の低墳丘をもつ形態とされ、規模が径14mである(菅谷・駒見1985)。底部穿孔壺は、畿内系二重口縁壺であるが(柿沼1996)、遺物の出土状況等は示

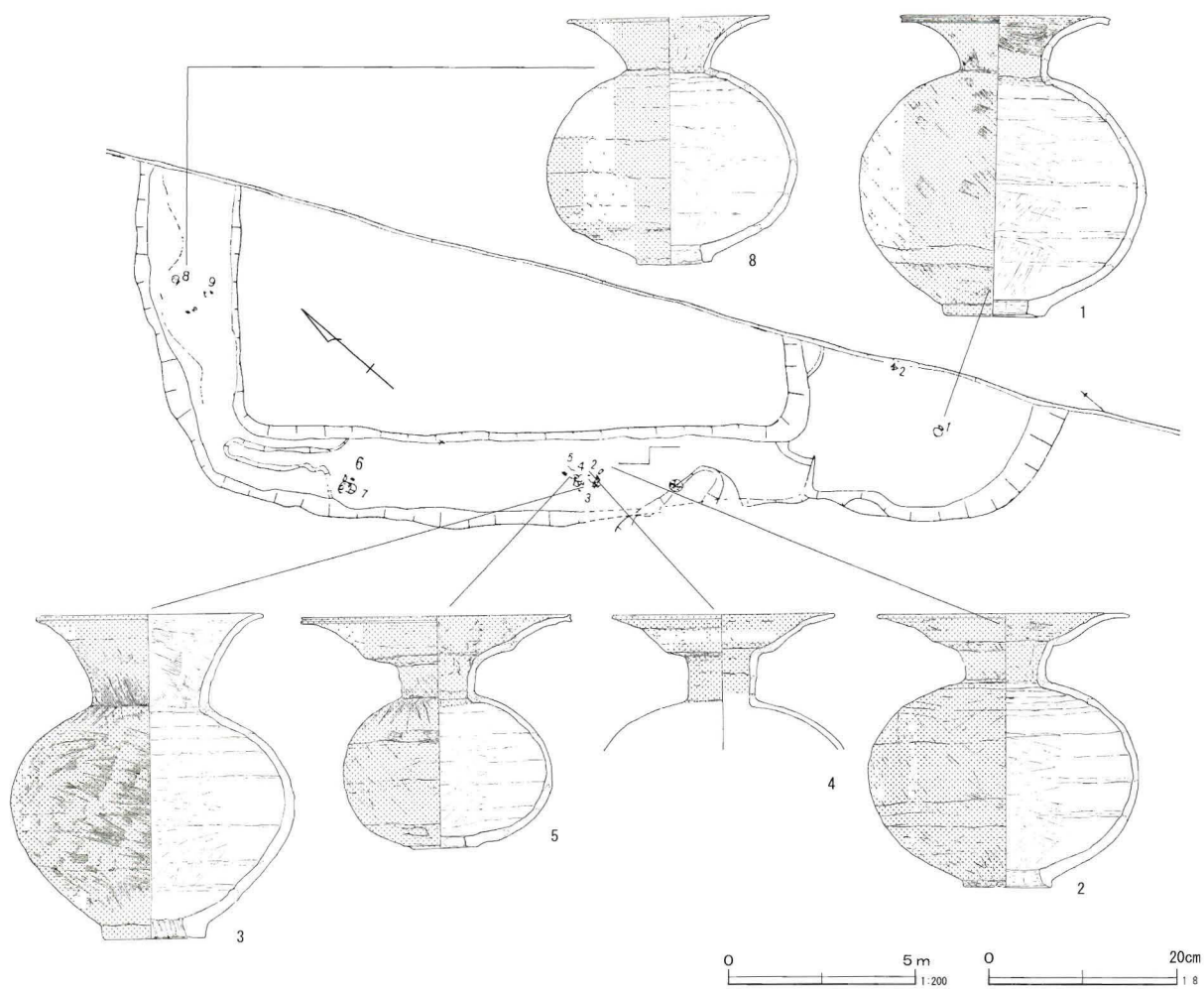
されていない。

(5) 上敷免SR2(深谷市)

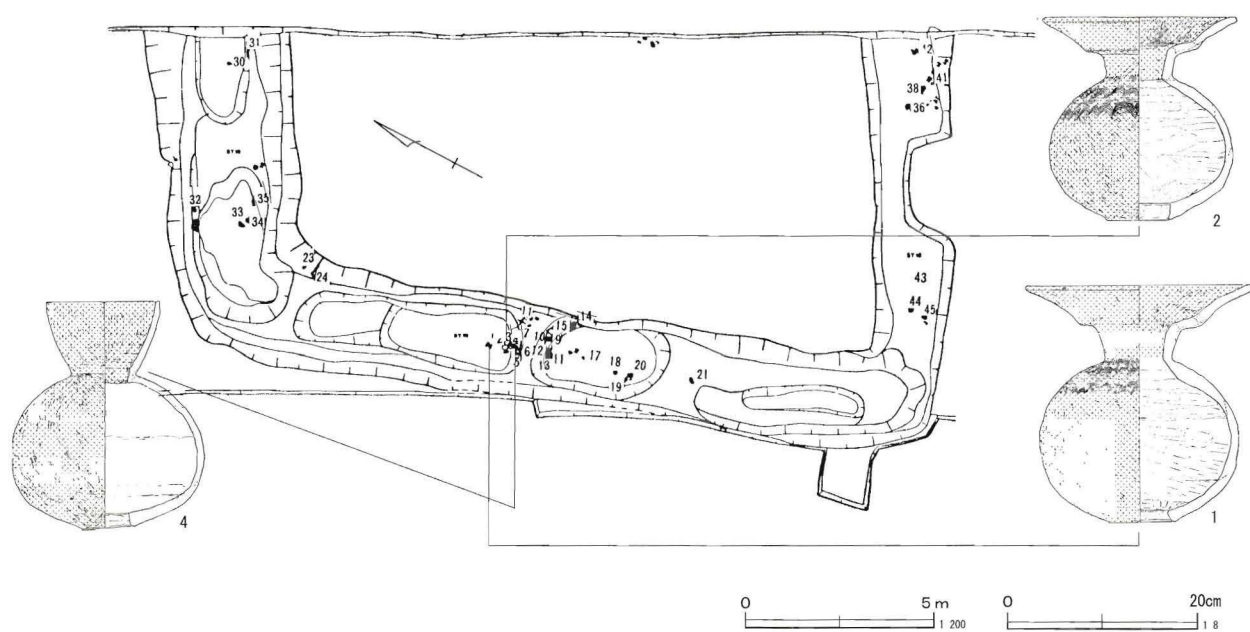
上敷免SR2は南溝のみ調査されており、北側の大半は調査区外へ延びている。方台部規模は東西3.4mで、非常に小さい。東溝1.8mに対して、西溝3.2mと幅広になっている。底部穿孔壺は、西溝の中層から2個体出土している(第7図、瀧瀬・山本1993)。

(6) 権現山遺跡群(ふじみ野市)

権現山遺跡群では、2号周溝墓(前方後方形周溝

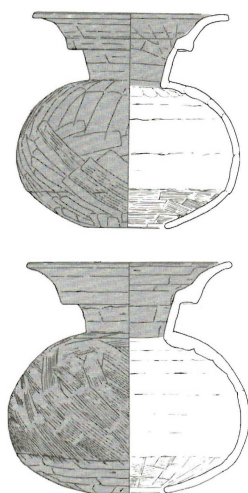


第5図 下道添 ST02 (坂野1987改変)

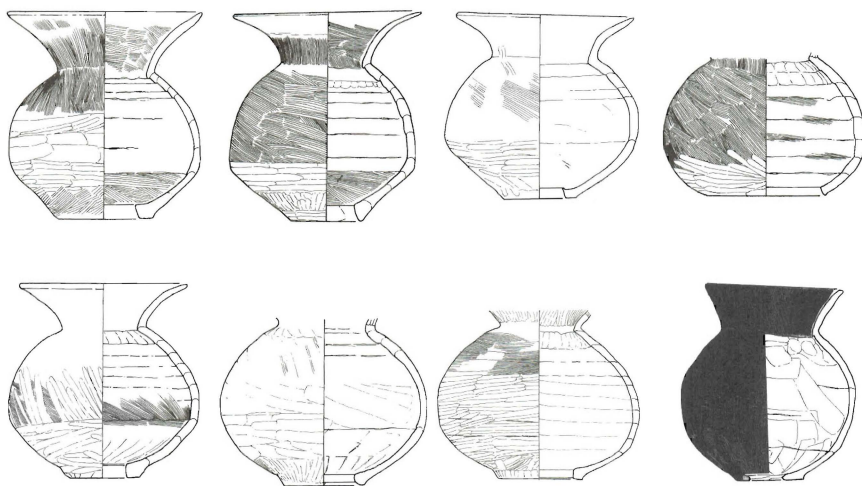


第6図 下道添 ST13 (坂野1987改変)

深谷市上敷免SR2
(瀧瀬・山本1993転載)

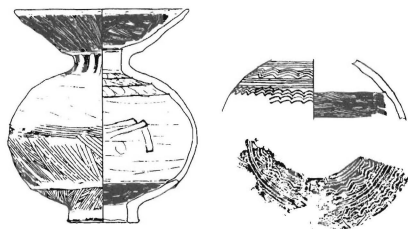


春日部市権現山1号(横川・長谷川・鬼塚2005転載)

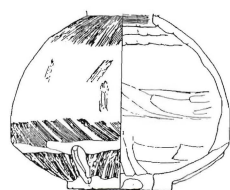


ふじみ野市権現山遺跡群(笹森1999転載)

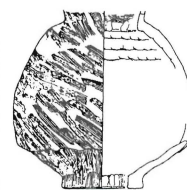
溝1



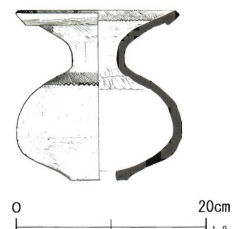
2号周溝墓



採集



桶川市西台遺跡
(塩野・増田1970転載)



第7図 焼成前穿孔壺の類例

墓)、溝1から、それぞれ焼成前底部穿孔壺が1個体ずつ出土している。2号周溝墓の壺は、頸部から下位の個体である。溝1の壺は完形で、その他に櫛描文が施された壺の肩部片が検出されている。また、採集品の中にも、頸部から下位の個体が見つかる(第7図、笹森1999)。

(7) 西台遺跡(桶川市)

第1号古墳における北側の周溝上部より、焼成前底部穿孔壺1個体が出土している(第7図)。古墳周溝出土であるが、壊された周溝墓があったと推定している(塩野・増田1970)。

(8) 権現山1号方形周溝墓(春日部市)

権現山1号は、土取りによって大部分が壊され、焼成前底部穿孔壺の確実な出土位置は不明である。その際に発見された11個体については、聞き取り調

査によって、周溝より一定の間隔をおいて発見したものと報告されている。調査できた北溝からは、1個体の出土に留まっている(第7図、横川・長谷川・鬼塚2005)。

以上、焼成前底部穿孔壺の類例を挙げ、出土状況がわかっているものは示してきた。

前節で挙げた大型の周溝墓の中で、規模が上位を占める周溝墓から、焼成前底部穿孔壺が出土していることがわかる。また、周溝墓群中の最大規模の周溝墓や、前方後方形周溝墓からも出土していることが窺われる。なお、生野山78号墳、上敷免SR2、西台遺跡、権現山1号については、全容が明らかでないため今回は扱いを保留したい。

上述については、『関東の方形周溝墓』の中でも、柿沼氏によって詳細に検討されている。広面・中耕

遺跡墳墓群中では、周溝墓の形態・規模によって出土土器の相違が指摘される。焼成前底部穿孔壺を有する有力な方形周溝墓から、穿孔土器をもたず土器の量も少ない下位の方形周溝墓まで、明らかに階層による序列化が進行しているとみなされている（柿沼1996）。

今回も、従前の指摘通りになったのであるが、その一例の中に木曾免SR4を加えることができたと考える。木曾免SR4は、焼成前底部穿孔土器を有し、規模の面でも大型の部類に入るため、優位性がかなり高いと考えられる。広面、中耕遺跡の有力墳墓と同等の地位を占める墳墓ということが言える。

6 焼成前底部穿孔壺の土器配置について

それでは、土器配置について、何らかの傾向が見出せないか検討を行ないたい。

広面、下道添遺跡以外の遺跡については、出土状況や個体数があまり判明していない。資料的には少なくなるが、木曾免SR4と、広面、下道添遺跡と比較してどのような傾向が読み取れるか検討を行なう。

下道添ST02、ST13における焼成前底部穿孔の二重口縁壺に関しては、一つの溝に集中して出土していた。しかし、下道添ST02において、他の焼成前底部穿孔壺が各溝から認められ、さらに報告では溝内への供献としている。また、下道添ST13では、方台部からの転落とするが、多くの器種とともにまとまって出土している。したがって、土器配置については、木曾免SR4とは相容れない状況である。

続いて、広面SZ9であるが、木曾免SR4の土器配置と類似していることが言える。焼成前底部穿孔壺、焼成前底部穿孔の埴が、南西溝の下層より出土し、方台部からの転落を想定されている。列をなして配置されていた状況が窺われ、類似した様相を想定できそうである。

また、他の土器については、広面SZ9の南東溝からは、「超大型壺」が出土している点が重要である。「超大型壺」は、中層より散乱した状態で出土している。

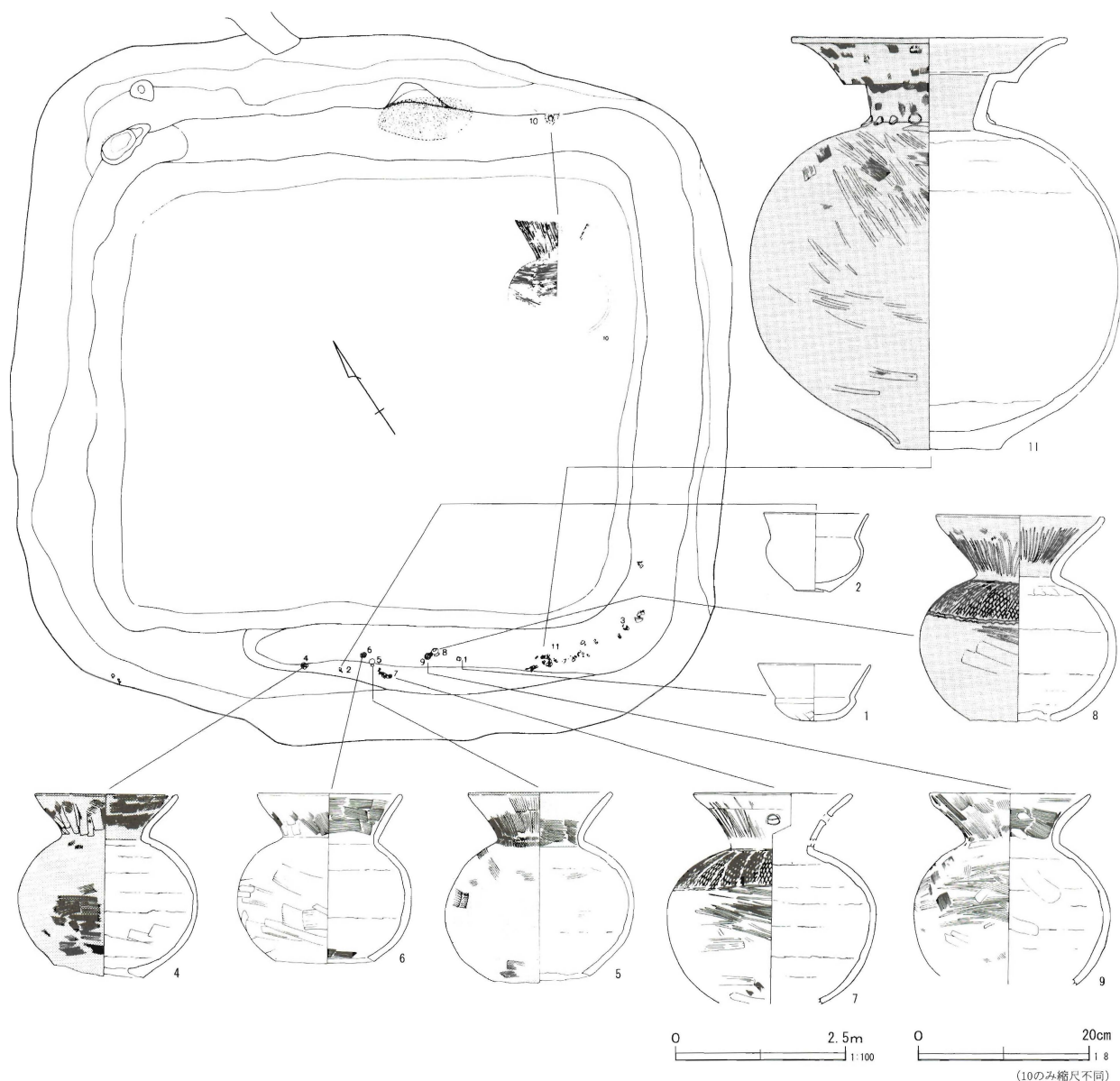
「超大型壺」の供献について、柿沼氏が広面SZ9などを例に挙げ、検討を行なっている。その中で、「超大型壺」の供献を弥生時代後期後半から続く地域伝統的な儀礼として位置づけている（柿沼2006）。出土状況は、中層から上層で、口縁部が下向きの状態や破片の状態で確認される場合がほとんどであると述べている。つまり、広面SZ9では、南東溝より出土している吉ヶ谷式系土器の「超大型壺」がこれにあたる。

結果として、地域伝統的な儀礼で使用される供献壺が、在来系であることから、大型周溝墓の被葬者が外来系ではなく、在地勢力から成長してきた「首長」と推測している。

一方、木曾免SR4からは、「超大型壺」とは言いえないが、大型壺が東溝から出土している。在地系と思われる大型壺は、器高・胴部最大径が30cm前後で「超大型壺」には遠く及ばない。しかしながら、主体をなす焼成前底部穿孔壺とは、異なった位置から大型壺が出土するという状況は似ていると思われる。大型壺の供献の段階、供献土器が変化してしまっているが、行為だけが残存していたと考えられる。

木曾免SR4では、「超大型壺」の供献儀礼が形骸化した最終段階と考えられるのではないだろうか。出土遺物からも、広面SZ9よりも木曾免SR4が新しいことが指摘でき、その傍証となると考えられる。

それでは、焼成前底部穿孔壺を一方向に列状に集中させる土器配置について少し触れておく。前述の通り、木曾免SR4と広面SZ9に確認できただけで、現在のところ他に例がない。なお、地域的に離れ、焼成後底部穿孔の単口縁壺の例ではあるが、東川端1号方形周溝墓において列状に並べる配置が確認さ



第8図 東川端第1号方形周溝墓（中村1990改変）

れている。そのため、参考資料として挙げておく（第8図）。

東川端1号は、方台部規模12.00×10.00mを測り、5基の周溝墓群の中で最も大きい。規格的なつくりの中型壺6個体が出土しており、焼成後底部穿孔である。うち2個体の肩部には、網目状文が施される。中型壺6個体、小型埴2個体が南溝の底面に接して、あるいは僅かに浮いた状態で出土している。加えて、大型壺2個体があり、北・南溝の上層より出土している。報告によると、大型壺は墳丘上に、中型壺は方台部テラスに列をなして配置されたものが転

落したと想定されている（中村1990）。

このような土器配置の系譜や意義を考えるうえで、近年、精力的に成果を発表している古屋紀之氏による圍繞配列の研究が参考となるであろう（古屋1998、2004、2007）。

本類例では、焼成前底部穿孔壺によって墳丘を囲むような形での配置は見られないため、圍繞配列とは異なったものと思われる。しかしながら、古屋氏が述べるように、古墳の埴輪や葺石といった外表施設には、一部分にしか配されない場合も見受けられる（古屋2007）。木曾免SR4の例なども、一部分にし

か配されない圍繞配列の可能性も考えておくべきである。

広面SZ9と同様(柿沼2006)、木曽免SR4も、在地系の要素をもちながら、外来系土器を受容するとともに、部分的に圍繞配列を採用したのであろう。

しかし、詳細な分析を経ていないため、圍繞配列と即断することは避けたいと思う。今後、類例の増加を待つこととし、焼成前底部穿孔壺の土器配置の良好な例として指摘するのに留めておきたい。

7 おわりに

大型周溝墓と焼成前底部穿孔壺の事例を概観してきた。両者には有機的な関係があり、ほとんどの大型周溝墓から、焼成前底部穿孔壺が出土していることが従前の成果と一致する結果となった。

木曽免SR4は、入西遺跡群の「首長墓」級の周溝墓と肩を並べるほど、大きさを誇る周溝墓であると指摘した。そして、供献土器についても、規格性が高い焼成前底部穿孔壺を用いており、小規模な周溝墓と比べて優位性が高いことを述べてきた。

坂戸台地では、前期古墳が未だ発見されておらず、附島遺跡、景台遺跡、勇福寺遺跡などから中・小型周溝墓が発見されているのが現状である。なお、谷を挟んで西側の台地上にある北谷遺跡では、全体規模21mの周溝墓が発見されている(黒坂2008)。しかし、北西溝を検出しただけで、出土遺物も少なく詳しいことはわかっていない。

木曽免SR4の築造時、周辺の台地では、すでに諏訪山29号墳や山の根古墳などの墳墓が築かれていたと考えられる(第1図)。木曽免SR4は、周辺の権力に抑えられ、墳墓築造を制限されていた可能性が考えられる。坂戸台地内では、元来、古墳を築造するほどの勢力を有していない地域であったのか、前期古墳は築造されていない。そして、木曽免SR4の

築造を契機に発展していくことがかなわなかったであろう。

しかしながら、木曽免SR4は、焼成前底部穿孔壺を有する大型の周溝墓であり、坂戸台地において、他と隔絶するほどの大きな権力をもっていた被葬者の墳墓と評価することができる。

最後に、今後の課題を述べて終わりにしたい。木曽免SR4の位置づけを検討するため、対象地域も狭く、網羅的に扱うことがかなわなかった。

木曽免SR4の時期と前後して、古墳も出現しており、その中には、焼成前底部穿孔壺が発見されているものも多い(第1図)。小地域ごとでは、周溝墓から古墳へと展開していく様相が示されている(柿沼1996)。

しかし、古墳時代前期の墳墓についての様相を捉えていくために、周溝墓と古墳の両者を同じ土俵の上で扱わなければならない。そのためには、「壺形埴輪」の定義とも関連する、底部穿孔壺自体の分析が必要だと考える。今回は、底部穿孔壺の分析については、実見を十分に行なえず、今後検討していく方向である。また、木曽免SR4出土底部穿孔壺の外見が、墳墓供献用としては見劣りする特異性についても、十分に議論が尽くされていないため、その中で位置づけていきたい。前期古墳出土の底部穿孔壺を含めて検討した上で、壺の系譜関係を把握し、系譜の相違によって政治的・社会的背景を捉えることができるのではないかと考えている。

謝辞

本稿を執筆にあたるとともに、日頃より福田聖氏から方形周溝墓について様々な助言をして頂いています。また、図面作成等にあたって、澤口和正氏、中嶋淳子氏に協力して頂きました。末筆ながら記して感謝を申し上げます。

註

- 1 木曾免遺跡の「方形周溝墓」は、確実に古墳時代の所産と考えられる。筆者の怠慢で、報告書の段階においても古墳時代の「方形周溝墓」という用語を使用している。用語の整理を行なえておらず、本稿では“周溝墓”という形で使用する。また、その他の遺構名については、各報告書、文献の記載にある遺構名・遺構略号を使用する。なお、遺跡名一略号の形をとって記述を行なう。
- 2 壺形土器などの「形土器」は、省略して記述を進める。

引用・参考文献

- 石坂俊郎 2005 「埼玉県の出現期古墳―そして三ノ耕地遺跡―」『東日本における古墳の出現』考古学リーダー4 東北・関東
前方後円墳研究会編 六一書房
- 石坂俊郎 2006 「南関東の様相」『前方後円墳とその周辺』第11回東北・関東前方後円墳研究会 発表要旨資料
- 柿沼幹夫 1994 「古ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『検証！関東の弥生文化 一粒の米が変えたくらし』埼玉県立博物館
- 柿沼幹夫 1996 「『方形周溝墓』出土の土器 北関東①埼玉」『関東の方形周溝墓』同成社
- 柿沼幹夫 2006 「大きな方形周溝墓出土の超大型壺」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会50周年記念論文集
- 加藤恭朗 1986 『附島遺跡』Ⅰ 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1997 『景台遺跡』Ⅲ 坂戸市遺跡発掘調査団
- 金井塚良一 1970 『諏訪山古墳群（第1次発掘調査報告）』東松山市文化財調査報告書第7集
- 金井塚良一他 1985 『東松山の歴史』上巻 東松山市
- 黒坂慎二 2008 『牛原／御新田／番匠・下道／横沼新田／北谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第353集
- 埼玉県 1987 『新編埼玉県史 通史編Ⅰ』
- 埼玉県さきたま資料館 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』埼玉県教育委員会
- 坂戸市教育委員会 1992 『坂戸市史』古代史料編
- 笹森健一 1999 『上福岡市史』資料編第1巻 自然史・考古
- 塩野 博・増田逸朗1970 『西台遺跡の発掘調査』桶川町文化財調査報告Ⅳ
- 塩野 博他 2005 『江南町史』資料編Ⅰ 考古
- 菅谷浩之・駒宮史朗 1973 「児玉町美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会』埼玉考古学会
- 篠田泰輔 2008 『木曾免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第352集
- 杉崎茂樹 1993 『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
- 瀧瀬芳之・山本 靖 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第128集
- 田中 裕 2005 「壺形埴輪と東関東の前期古墳―土師器とは異なる壺形埴輪の周知とその系譜―」『千葉県文化財センター研究紀要24―30周年記念論集―』
- 富田和夫 1994 『稻荷前遺跡（B・C区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第145集
- 長滝歳康・中沢良一 2004 『白石古墳群Ⅲ―早道場地区― 後海道遺跡・中道遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第15集 美里町教育委員会
- 長滝歳康・中沢良一 2005 『南志波川遺跡 志波川古墳・志波川遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第16集 美里町教育委員会
- 中村倉司 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
- 坂野和信 1987 『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
- 福田 聖 2000 『方形周溝墓の再発見』同成社
- 福田 聖 2007 「方形周溝墓における土器使用と群構成」『原始・古代日本の祭祀』同成社
- 古屋紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義―東日本における古墳時代の開始―」『駿台史学』第104号
- 古屋紀之 2004 「底部穿孔壺による圍繞配列の展開と特質―関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に―」『土曜考古』第28号
- 古屋紀之 2007 『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
- 増田逸朗編 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
- 村田健二 1990 『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集
- 矢代 登他 1986 『美里町史』通史編
- 山岸良二 1989 「穿孔土器論素描―南関東『周溝墓』出土例を中心に―」『史観』第21号
- 山岸良二編 1996 『関東の方形周溝墓』同成社
- 横川好富・長谷川清一・鬼塚知典 2005 『権現山遺跡第1次調査』庄和町文化財調査報告第15集 庄和町教育委員会